

【連載】

北のサクラ

彩る

歴史と文化

第2回



伊達、厚岸、根室の名木

森林インストラクター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として小樽、釧路、函館などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。2016年森林インストラクターの資格取得。現在、日本森林インストラクター協会会員、道新文化センター講師。

道内の古い寺院を訪ねると、由緒ある名木に出会うことがあります。伊達市の善光寺、厚岸町の国泰寺、根室市の清隆寺では、サクラが長い間、大切に育てられてきました。花をめぐる習慣は地域に浸透し、今ではその土地ならではの個性的な桜まつりが開かれ、地元へ活力を与えています。

伊達の石割桜

風光明媚な伊達市の有珠湾を望む善光寺。裏山の善光寺自然公園を含む一帯は、有珠山の山体崩壊による大量の岩石で覆われています。

善光寺から公園内の坂道をのぼり、しばらく進むと、大きな岩を切り開いて勢いよく伸びるエゾヤマザクラに遭遇します。「石割桜」と呼ばれる北海道記念保護樹木です。その案内板にはこう書かれています。

「文化4（1807）年蝦夷地近海にロシア船が現れた際、『たとえ敵の砲丸に倒れることがあっても捕らえられて辱めを受けてはならぬ』と里人を諭し、処々に仏幡をたてて守らしめたという奇僧・二世鸞洲上人が石を割るくらいの強靱な心をもってがんばろうという気持ちで込めて植えたものです」

江戸幕府はロシアの南下政策に対処するため、蝦夷地に幕府直轄の寺を配置し、布教活動を通じて人心の掌握に努めました。その一つ善光寺は1804（文化元）年に建立され、様似町の等澗院、厚岸町の国泰寺と

もに「蝦夷三官寺」と呼ばれました。

石割桜はその姿から尊い木とされ、寺周辺のサクラは「有珠のサクラ」として次第に知名度を増していきます。

人気が飛躍的に高まるのは鉄道の開通後です。1928（昭和3）年9月に有珠駅が開業すると、室蘭から簡単に行けることから、1929（昭和4）年の花見は盛大なものとなります。



善光寺自然公園の「石割桜」

同年5月19日の日曜日は室蘭発有珠行きの臨時列車が運行し、往復2割引きの切符が発売されました。また、有珠駅から善光寺までの足を確保するため、民間会社が善光寺前に車庫と待合所を新設、自動車5台で輸送にあたりました。

さらに、室蘭からは料亭の出店が相次ぎます。境内では酒、ビールのほか、弁当やそば、おでんなどを販売。会場に芸者を待機させ、宴会に派遣する店もありました。

室蘭毎日新聞は「桜の名所として全道随一とまで謳はれるに至った」(1929年5月19日)と評しています。

有珠のサクラを象徴する石割桜が道の記念保護樹木に指定されたのは1972(昭和47)年。1978(昭和53)年にはエゾヤマザクラが伊達市の木に選定されます。こうした流れを受け、市は善光寺の裏山9.4㍓を借り1979(昭和54)年、善光寺自然公園を開設します。

樹齢200年とされる石割桜は腐食が進んでいましたが2001(平成13)年、腐食部分を削って特殊な樹脂剤で埋める外科治療を実施。3年目からは花の数が増え、根元からは代替わりとなる幼木が伸びています。

境内にはエゾヤマザクラやソメイヨシノ、シダレザクラなどが植えられています。花見を盛り上げようと2022(令和4)年から、地元の実行委員会が「有珠善光寺桜まつり」を開催、キッチンカーなどの出店が並び、訪れた人たちを楽しませています。



いろいろなサクラが見られる善光寺境内

厚岸の老桜樹

蝦夷三官寺の一つ、厚岸町の国泰寺には、「老桜樹」と呼ばれる老木があります。1830(天保元)年ごろ、寺の改修に際し、厚岸場所請負人の山田文右衛門が奥州石巻(現宮城県石巻市)から移植したと伝えられる高さ約10^{メートル}、幹周3^{メートル}のオオヤマザクラです。場所請負人はサケ、マスなどの海産物を売買する権利を持つ者で、取引額に応じて税金を松前藩に納めていました。



国泰寺の「老桜樹」

以来、寺で花見が行われるようになり、歴代住職の記録「日鑑記」には、1862(文久2)年、来客にサクラの下で酒を出したり、地元役人宅の婦女子が見物に訪れたりしたと書かれています。

大勢集まるようになるのは第13世の住職が就いた1902(明治35)年以降。境内に風雲閣という建物を建て、地方の名士らを招いて観桜させたのが始まりといわれています。

厚岸のサクラ植栽に貢献したのは上田勘兵衛です。漁業家の勘兵衛は大正初期(1912年以降)、私財を投じ、近隣の山からサクラの若木を掘り出し、街に移植しました。

大黒島での作業には大勢の人夫を使い、崖から海へ吊り下ろし、はしけに載せて海上を輸送。陸揚げ後は馬車で搬送するという重労働でした。

国泰寺や厚岸神社、正行寺、元役場などさまざまな場所に植え、手入れも怠りませんでした。馬車の時代、勘兵衛自ら道に落ちた馬ふんを集め、サクラの根元に肥料代わりに埋めて歩きました。

1917（大正6）年12月の鉄道開通以降、花見客が遠方から大挙して訪れるようになります。国泰寺では翌年、観桜会を盛大に開催するため、施設を一部修繕し、近隣の名士約500人に招待状を送りました。

花の見頃の5月18、19日は土曜、日曜と重なり、釧路からの列車は満杯。ダイヤの都合で一泊する人が多く、旅館は満員、飲食店も大繁盛でした。

その後、映画「ゴジラ」のテーマ曲で有名な作曲家伊福部昭さんが、この地でサクラの新種を見つけます。北海道帝国大学（現北海道大学）農学部を卒業した伊福部さんは1935（昭和10）年、厚岸森林事務所に林務官として赴任しました。

「厚岸では『アッケシザクラ』という新種のサクラを発見したことも忘れられない思い出です。場所は国泰寺の付近で、北大の舘脇操さんが新種と認めて、二人の名が付いています」（北海道新聞1985年4月3日夕刊）と回顧しています。

1936（昭和11）年、同学部の舘脇助教授が新種と認定し、林業雑誌に掲載しました。現在はオオヤマザクラの変種だとして、和名も2人の名前が付いた学名も使われていませんが、伊福部さんと厚岸のサクラとのかかわりを示す貴重な資料です。

戦後、花見のメイン会場は子野日公園へと移ります。元町長の子野日弘毅が所有し「翠湖園」と称していた土地を町が1962（昭和37）年、親族から譲り受け、エゾヤマザクラを移植、多くの町民が憩える場にしました。

花見客がさらに増えるのは、1972（昭和47）年9月の厚岸大橋開通がきっかけです。それまで鉄道や国道が通る湖北地区と国泰寺や子野日公園のある湖南地区は厚岸湖の湖口で分断され、両岸を行き来するにはフェリーが欠かせませんでした。

橋の開通で往来が簡単になり、翌年の桜まつりには釧路からマイカーが押し寄せ、日曜日は朝から国道が渋滞。橋の周辺は6*にわたって身動きがとれなくなりました。厚岸署員は交通整理、役場職員は駐車場への誘導にあたりましたが、2万人の花見客に終日振り回されました。

1950（昭和25）年に始まった「あっけし桜まつり」は2004（平成16）年、牡蠣まつりの要素を加え「あっけし桜・牡蠣まつり」となります。厚岸の2枚看板がそろい、祭りの魅力が一段と増しました。



にぎわう「あっけし桜・牡蠣まつり」

根室のチシマザクラ

気象庁がサクラの開花を観測する標本木は全国的にはソメイヨシノですが、寒冷地の北海道はエゾヤマザクラが大半です。そんな中、根室だけは、観測が終了した2010（平成22）年まで全国で唯一、チシマザクラでした。

分類上はタカネザクラの変種です。根元から幹が分かれ、枝が横に広がり、高さは3～5メートルで、エゾヤマザクラのように大きくはなりません。寒さに強く、自生地は本州中部以北の高地や千島列島などです。

チシマザクラと命名したのは植物学者で後に札幌農学校（現北海道大学）教授となった宮部金吾^{みやべ きんご}です。1884（明治17）年、千島列島の択捉島^{えとろふとう}で採取し、「千島植物誌」という学位論文に記載する際、この名を付けました。

根室では1869（明治2）年、地元の大工^{くなしりとう}が国後島から持ち帰り、自宅に植えていましたが1903（明治36）年、檀家^{だんか}だった縁から清隆寺に寄贈し以来、境内で大切に育てられてきました。



清隆寺のチシマザクラ

1945（昭和20）年7月の米軍機による大空襲は、市街地の8割が焼失、死者400人という大惨事となりました。火の手は寺の近くまで迫りましたが、幸い難を逃れチシマザクラも生き延びました。

戦後、チシマザクラを根室のシンボルとするため、市や千島桜保存会が苗木の普及活動に取り組み、清隆寺の樹木を親木として、市役所や裁判所などの公共施設や民家にも植えられています。

1969（昭和44）年には根室市の木に選ばれ、1973（昭和48）年には清隆寺の木が道の記念保護樹木に指定されました。

一方、千島列島ゆかりの桜であることから、「望郷桜」として北方領土返還運動にも貢献しています。1992（平成4）年には市内の老人クラブが採取したチシマザクラの種を「千島桜咲かそうメール」として地元の郵便局から全国に発売しました。

2003（平成15）年には北方領土復帰期成同盟が返還要求運動の象徴としてチシマザクラを公募で選び、花をモチーフにしたイラストを啓発活動に使用しています。

こうした中、根室ではエゾヤマザクラを活用した森づくりも進んでいます。明治公園では2006（平成18）年の強風で倒木被害に遭ったカラマツ林を「さくらの森」に再生する事業が翌年から始まりました。

4年間で約700本のエゾヤマザクラが植えられ、園内の既存の桜も新しい景観を創出するため、サイロ広場に移植されました。

同公園は開拓使の牧場跡地で、サイロ広場には赤れんが積みのサイロが3基あり、国の登録有形文化財に指定されています。

2021（令和3）年からは桜の開花時期にサイロをライトアップする催しが始まりました。市と観光協会の主催で、桜とサイロが春の夜空に浮かび上がる仕掛けです。「日本一遅咲きの桜」をうたう根室のユニークな取り組みです。



ライトアップされる明治公園のサイロ

<主な参考資料>

- ・伊達郷土史研究会編「伊達の風土を歩く」伊達郷土史研究会、2022年
- ・伊達市史編さん委員会編「伊達市史」伊達市、1994年
- ・厚岸町史編さん委員会「厚岸町史 下巻」厚岸町、1975年
- ・厚岸町史編集委員会編「新厚岸町史 資料編2」厚岸町、2009年
- ・厚岸町教育委員会編「古老が語るあつけし昔ものがたり 第2集」厚岸町教育委員会、1992年
- ・土屋広志「厚岸の名木特選」『朱化石 厚岸文庫 その一』厚岸を考える会、1985年
- ・文部省「天然記念物調査報告 植物之部第十八輯」文部省、1938年
- ・宮部金吾著、宮部金吾博士記念出版刊行会編「宮部金吾」大空社、1996年
- ・根室市役所「広報ねむろ」2010年7月号、2024年7月号